

マッチングアプリを始めたのは、友達に半ば強引に勧められたからだった。

正直、あまり乗り気じゃなかった。写真だけ見て人を判断するのも、初対面でご飯を食べるのも、どこか不自然な感じがして苦手だった。でも登録してみると、メッセージが楽しみになる人ができた。

真佑さん、という人だった。

写真は少しぼかしたような写真だった。プロフィールを見て、最初は「よくいるチャライ感じの人かな」と思っていた。話してみると、テンポがよかった。こちらの話をちゃんと聞いてくれるし、返信が面白い。気づいたら毎日やり取りするのが当たり前になっていた。

(真佑さん、すごい話しやすいし、会ってみたいな……)

そう思うようになった頃、真佑さんから初デートに誘われた。返事はもちろんイエス。

初めて会う日は、駅の改札前だった。写真より少

し背が高く——そしてこちらに気づいた瞬間、軽く手を挙げて笑った。

(……あ、やばい。かっこいい)

ぼかした写真で見たときから「整った顔なのかな」とは思っていた。でも実物はすごいイケメンだった。シャープな輪郭に、ちょっと癖のついた黒髪。薄いシャツの袖をまくった腕が、思ったよりしっかりしていた。目が細くて、笑うと少し弧を描く。その笑い方が人懐っこくて素敵だった。

「あ、来てた。ごめん、ちょっと迷って」

「全然、私も今来たところです」

「よかった。……あれ、思ったより背小さいね」

「そんなこと言います？ 初対面で」

「いや、可愛って意味で。怒らないで」

笑いながら言うから、こっちも自然と笑ってしまった。その後も緊張しているこちらをほぐすみたい

に軽く話しかけてきて、気づいたら普通に並んで歩いていた。

カフェでコーヒーを飲みながら、二時間くらい話した。楽しかった。本当に、普通に楽しかった。

（この人、思ったより全然いい人かも）

そう思っていたら、真佑さんが「うち近いし、お茶でも飲んでく？」と言った。

「……えっと……」

（部屋に？ でも、それは……）

断ろうかなと思ったら、「近いし」「お茶だけ」と言われ、なんとなく断りづらかった。悪意があるわけじゃなさそうで、怖い感じもしなくて、「大げさに断るのも違うかな」という気持ちになった。

「……じゃあ、少しだけなら」

「よかった！ じゃ、案内するよ」

(少しだけ。お茶だけ。すぐ帰ればいい)

タクシーに乗り、真佑さんの家だというマンションまで向かった。そして大きなマンションのエントランスに入り、エレベーターを上って、奥の部屋に入る。

あまり生活感のない、整った部屋だった。本棚に本が並んでいて、テーブルの上にはコーヒーカップが一個置いてあって、雑誌の部屋みたいだった。

「座って。紅茶でもいい？」

「あ、お願いします」

真佑さんがソファを示す。にっこりと、感じよく笑いながら。

言われた通り、私はそこに座った。

「インテリアにこだわってるんですか？　すごい、綺麗ですよ」

「そういうわけじゃないけど、あんまり欲しいもの

がなくてさ」

そんな話をした。他愛もない話だった。大学のこと、仕事のこと、最近ハマっている映画のこと。カフェで話していたのと、なにも変わらなかった。むしろ静かな分、話しやすいくらいだった。

(よかった。本当にお茶を飲むだけだ……)

どのくらい時間が経っていたんだろう。気づいたら手元のカップが空になっていて、でもそれにも気づかないくらい話していた。

(楽しいな、また)

そう思った瞬間、ふっと間があいた。

真佑さんがじっとこっちを見ていた。なんだかさっきまでとは違うような視線だった。

(……あれ)